

嗚呼雲間に見ゆる月よ。

大空を横ぎる月よ

天の光を照らす月よ

夜の美妙の女王よ

吾、若し眼を爾の高き姿に転じ

吾が心一度び爾の美妙の心に通じ

吾が想一度び爾の天のものなるに感じ

愈々仰で愈々望み

益々感じて益々想ひ

太平洋の洋心を思ひ

老森の木の間

を思ひ

高山の絶頂の

雪を思ひ

爾の美妙の姿

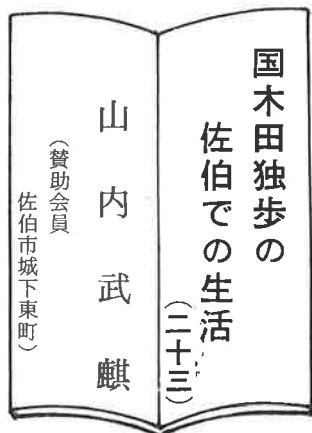
の愈々妙へ

なるを感ず

れば

吾が感情は如

何に高くも



亦た清くなるよ

吾が喜びの如何に静かにも亦深くなるよ

吾が望の如何に大に亦た誠になるよ

吾が心の泉は涌きて流れ

吾が眼はさへて澄み渡る

嗚呼。美妙の月よ。天の光よ。

吾が姉妹よ。

と、月の美を嘆賞している。独歩は殊の外月光の美を愛していた。

二十二日

日曜日

昨日石崎ためさんより来状

一昨日水谷真熊君より来状

一昨日頃よりゲーテの「ファウスト」を読んでいる。

はじめて「ファウスト」の大きく美しいのを感じた。「

ファウスト」を読むと昂然として大自然の中に生きてい

る思いがする。

吾は確かに進歩、発達しつつあるなり。然り之れ人性、と自然の法則なり、之れ人間の希望なり、余は確

かに大且つ真、美且つ偉、人間の最高想に向て発達し
つゝあるなり。

と、自覚している。

次に花と鳥とを詩に歌っている。

花よ、鳥よ。

すみれの花よ。谷の鶯よ。

今日われはなれたちと楽みぬ。

楽しき心。なれも持たなん。

美しき花よ、神のかざりよ 不思議の力！

妙なる音になく鶯よ、なれも天地のしらべなるかも

吾はつゝじの花びらを見る度に

言はれぬ高き心に入る。

言はれぬ楽しき心に入る。

言はれぬ望みに入る。

あめつちや。かざり知られぬあめつちや。

心は花の一ひらなり。

花も花！ 人は最美最高の神の花！

花を見て、吾れ又た感じぬ人の美を！

神の心かざり知られず、只た美、只た善！

二十三日の記には前日の二十二日に第二回目の元越登
山をした記を書いてある。

昨日教会の拝礼が了って、同遊の者七人と一しよに木
立村の元越山に登った。

元越山は自分の書斎の前面に立つ高山である。前一度
弟と共に登山した。その時の美しかったことを話すと諸
子もまた登山を思ひ立ってとうとう一しよにまた登山し
たのである。

満郊野、満山谷、春色は到る処にみちぬ。新芽の美
は今更の美なり。鶯の音、ほがらかに谷間々々になく
をきゝぬ。つゝちの花さかり、椿の花さかり、其他名
も知らぬ草木黄、白、の色を競ひぬ。ただ天曇りて光
なく、美の多分を消したり。

と、光景を美しく描写してある。

次に時を詩に詠んである。

嗚呼時よ、時よ はてしなき時！

吾れ、ひと、思ふて時を思へば、

身も心も何の数かわ。

嗚呼不思議の連続！

不思議の力！

人は泡沫の如く時の流に生滅す。

昨日は逝きぬ。楽しみに待ちし昨冬は逝きぬ。

今夏は来らん。楽しみに待つ今夏は来らん。

而して忽ち逝かん。少年の時は過ぎぬ。

とこしかへに逝きぬ。

昔西行が感傷しける「時」

昔カーライルが感傷しける「時」

昔少年詩人が泣きける「時」

時はめぐりぬ、彼等皆な老ひぬ。

而して彼等皆な死にけり。

もと此世に在らざりし如くに、

又た此世より消へぬ。

而して時は息まず、めぐりめぐるなり。

嗚呼吾も忽ち老ひなん。忽ち死なん。

生！ 時のはたらきなり。

死！ 又た時のはたらき！

嗚呼時よ！時よ！はてしなき時！

時の意味は何ぞ。おそろしき時の力は！

百年も忽ち過ぎん、千年も忽ち逝かん。

千年の千年、萬年も忽ち逝かん。

オー人類！ 人間！

爾は「時」の塵か！

茲に於てか吾れ一片の美花を信ず。

茲に於てか吾れ靈界の呼吸を感ず。

茲に於てかわれ宇宙の心を感じず。

動く時、 動かぬ空間！

咄！ 無窮、無限、無際！

嗚呼吾が魂は此事実にをのゝく。

美妙！ 嗚呼美妙よ！ 爾只だ、

吾が此の戦慄を救ふ！

嗚呼無数の人の魂！

此のはてしなき「時」のうちに浮沈生滅する、

此の數知れぬ人の魂！

爾等、吾等の行末は何ぞ。

只だ見よ、只感ぜよ、只だ聞け、

美妙の幽音、美妙の靈光を。

と、はかなく過ぎいく時の哀愁を訴えて、ただこれを救

うものは美妙であると、詩を綴つてある。

二十四日の記

昨日吉見おば様に発書す。妻を迎ふべきや否やに就て相談す。且つわが母と相談せられんことを申しやる
昨夜富永・尾間の両氏来訪、用事は学校に付てなりと、ある。

さて、この用件は何であつたか。富永日記にも尾間日記にも記してある。尾間日記を見ると、この日漢学の授業がすんで富永と一しよに日置氏を訪ね、学館の将来のこと、目下学校を休んでいる六名の者達のこと、なおまた国木田教師のことについて質し、またお願いもした。日置氏は出校しない生徒は今一度諭すこと、国木田教師とは一ケ年契約であるのでそれまでは決して閉校したり辞めてもらうことはしない。と、云つた。帰途国木田先生を訪ねてその顛末を報告した。とある。

次に詩がある。

吾今まことに茲にあり。

嗚呼此の吾ぞ不思議のはじめなる。

吾とは何ぞ、何の意ぞ。

吾！ 此の肉体 此の境遇、此の吾！

思へば不思議の至りなり。

仰げばはてしなき大ぞら在り。

日あり月あり星あり、雲は漠々。

花は吾が見る前に咲けり。

鳥は今朝柳の梢に鳴きぬ。

其の声は妙へに響きて吾は聞きぬ。

嗚呼吾！ 此の吾！ 花と何の縁ある、

月と何の關係ある、星と、日と、大空と

嗚呼自然とは不思議のものかな。

此吾と此自然と交々想ふて愈々怪しく愈々恐ろし。

死は吾が上に在り、老も亦た！

されど自然は老ひず、死せざるなり。

花よ、月よ、梢の鳥よ。

なれたちと吾と何の異なる所あるぞ

友よ、兄弟よ、一花よ月よ 美妙の使よ、

吾を伴へ！

と、自然を詠んでいる。

次に

人は此の世界でどんな生活をすべきか。これは人がやめられない質問である。生活しつゝあるのでこのように問うのである。

と、記して次に詩がある。

そも吾は、此世にかくは生れたり。

生れたり。吾れ知らずして生れたり。

生れて吾は此の年つき、

今日の今まで住みにけり。

今も今とて此の如く、此の世に吾は生くる也。

如何にして吾此の命を送るべき、

如何にすれば吾が命、まことの命にかのふべき。

月日は待たず自から

吾を墳墓に送りゆく。

さり乍ら吾れはたしかに吾にして

命は確に命なり。

世界はたしかに世界なり。

さて吾は此の命如何に此の世界に送るべき！

願みて何と答へん。

曰く、只だ美妙！

宇宙は美妙人は情！

美妙と情ぞ真なる！

真は人の命なれ！

真は宇宙の命なれ！

谷川の流れの音に聞き入りて

夕暮れに、星を待ちつゝ、

吾独り、森かげ静かに歩みゆく。

生ける世界、妙なる自然は吾に告ぐ、

「贊めよ、神を、安めよ心を、

信ぜよ情を。静かに歩め星の下に！」

嗚呼自然の美妙、自然の温情！

自然は吾を「時」より救ふ

嗚呼如何に生くべき、

曰く時の外に生きよ。

則ち自然の美妙と

人間の情とのうちに生きよ。

これぞ永久の命なれ。

と、如何に生きるべきかと問うて、自然の美妙と人間の情との中に生きよと、これが永遠の命であると、絶叫している。

一昨日の日曜日夕暮から降りつゞいていた雨は今朝になって晴れた。新鮮な朝の光は新緑の地上を照らして真青な大空には白雲が雨気を漂して浮かんでいる。

嗚呼春！ 春！ 春！

美なる、命ある、力ある、呼吸する春よ、

自然の妙へに妙なる消息よ。

花一片に神の美を告ぐる春よ。

吾爾と共に生きん。

と、感じた詩を記してある。

今夜はファウストを読み、またウォーヅウォースの詩
「雲の如く漂ふ」と「チンタルン精舎」の二つの詩を読
んだ。

夕方岡の谷を散歩した。うす暗い森と小数の山とが水
田に倒しまに影をおとして、枯れていた谷川も昨日の雨
で流れが急である。

次に詩がある。

嗚呼詩人たち、吾爾等と行かん。

高き感情は爾等の命なり。

高き感情！ 天の如く高し！

美妙の感情！ 自然の如く美妙！

嗚呼吾れ御身達と生きん。

夜更けぬ。月雲間を破りて東の山を登る

山・河・野・村・森！ 寂 なり、

詩人達よ、吾れ御身達と生きん

此の幽玄無窮美妙の天地に於て、

然り吾れ茲に御身達を慕ふ。

見よ、上玄の青月雲間より出でぬ

静かに吾を照らす。

嗚呼吾！ 此に住む吾！

人！ 情あり命あり心ある人！

月は吾に非ず、吾は月に非ず

されど吾と詩人等と共に人！

詩人達は月と共に此世界に神聖に住みぬ

嗚呼月よ、詩人よ！

吾御身達をあはせて慕ふ。

高き情よ、来れ、

高き美よ来れ、

高き希望よ、あゝ高き情よ。

月よ、詩人よ、 自然よ、 情よ！

と、詩人にあこがれ、慕って詠んでいる。